
フーコーにおけるテキストの空間性について

『知の考古学』¹⁾を中心に

重見晋也

はじめに

テキストを対象とした研究には3つの異なるアプローチがあるように思える。文学や哲学などの学問領域が確立された以降に限定すると、テキスト研究の最初の試みは、フランスを中心とする構造主義たちによって始められたと考えることができるだろう。構造主義者たちはテキストを内的な規則性を有する実体として考え、テキストと呼ばれるある一つの実体がどのような要素から成り立ち得るのかについて、主にソシュールらによって導かれた言語学の成果を援用しながら研究し、さらにテキストの要素がそれぞれどのように関連しあい、規則づけられ、そして構造化されているかを解明しようとした。このような学問的関心はテキストの文体や語りといった現象に焦点を当てた文体論やナラトロジーといった研究分野を生み出したし、ジャンルに限定することなくテキスト一般の存在論を主に哲学的な関心から記述したウンベルト・エーコの *A Theory of Semiotics* のような論考にも結実している。構造主義的なテキスト研究は、例外を指摘することはできないにせよ、基本的には一つの個別なテキストを取り上げそのテキストの内的な体系性を抽出するという研究を積み重ねることによって、最終的には包括的な原テキスト構造とでもいうべき構造化をあぶり出すことができると考える。

個別なテキストを対象とした研究を総合するという手法は似ているが、テキストは内的体系性といった仮定的な構造体によって規定されているのではなく、より現実的に支持素材の特性によって本質的に基礎づけられていると考える研究もある。こうした研究方法はしばしばメディア論という名で総称されているが、1964年に発表されたマーシャル・マクルーハンの *Understanding Media* はその先駆けをなす研究であると考えることができる。マクルーハンのメディア研究は、「話されることば」から「兵器」や「オートメーション」に至るまで、それまで紙に印刷されたテキストが担うと神話的に見な

されてきた情報伝達手段の役割が第二次世界大戦を経てその社会的地位を確立したテレビなどのマスメディアに代替されるようになった社会背景に根ざすものであった。言い換えればテキストに関わる「メディアの進化」という現象が、研究の契機になっているということができるのである。こうした「メディアの進化」は、1990年代半ばにインターネットの世界的な広がりという現象にも見るのであり、「デジタル革命」といった感情的な呼称とともにハイパーテキストを対象とした研究もこの社会現象を前後して始められるようになった。デビット・ボルターの *Writing Space* やジョージ・P・ランドウの *Hypertext* は、この情報伝達における媒体の転換期を逃すことなく考察し、デジタル時代における媒体の物質性によってテキストにもたらされた規約の変容を明らかにしたのである。もちろんハイパーテキストを対象とした萌芽的な研究に先立って、ウォルター・J・オングが *Orality and Literacy Technologizing of the Word* の中で明らかにしたように、書かれたテキストと話されたテキスト（この問題意識自体は既にマクルーハンによって提起されてはいたが）の根本的な異質性を強調する研究や、あるいはエリザベス・L・アイゼンステインが活版印刷の発明前からいわゆるインキュナビュラの時代までの印刷されたテキストとその技術革新に焦点を当てて研究した *The Printing Press As an Agent of Change* も、テキストを対象としたメディア論として位置づけることができるだろう。

構造主義的であれメディア論的であれテキスト研究としてみた場合に両者に共通しているのは、どちらもある個別のテキストを研究対象として位置づけているという点である。これらの研究は、それが複数のテキストの中で占める位置もあるいは時代も全く異なるテキストから、それが「テキスト」と呼ばれ得るという理由においてのみ、帰納的思考によって原テキスト構造と呼ぶことができるような規約を抽出してきたのである。しかし、ジュリア・クリステヴァが提唱し人口に膾炙している「間テキスト性」の概念が示すように、テキストは1つだけが他のテキストから切り離されて存在しているわけではない。テキストはその他の多くのテキストとの参照関係の内に実在するものである。ここからテキストを複数のテキストの総体からなる「一つの現象」として考えることが可能になる。「現象」あるいは「コンテキストに規定されるテキスト」。こうした観点からの研究は、言語学の分野では語用論やそれに基盤を与えたラングショー・オースチンのスピーチ・アクト理論において推進されてきた発想であり、哲学や文学の分野においてはハンス＝ゲオルグ・ガダマーやウォルフガング・イーザーといったドイツの解釈学的な伝統において研究されてきた。しかし、これらの解釈学的研究においても、一つの現象としてのテキストを構成する各々のテキストが、どのような規則性においてまとまりを保っているのかについてははっきりとした説明が提示されているわけではないように思える。

われわれのテキスト理解が、解釈学的なあるいはテキストを一つの現象としてとらえ

る観点を、経験論的に支持していることに疑いはないだろう。テキストを一つの現象として見なすということは、個別のテキストを一つだけ取り上げてその構造を究明することだけで満足できるものでもないし、テキストを実在させているさまざまな物質に固有の特性がテキストの生成と解釈にどのように関わっているかを考察するだけでも不十分である。個別のテキストの実在性は、対象となるテキストと他のテキストとの関連性の中においても説明されるべきなのである。また現象としてのテキスト研究もまた独立して存在するべきものではないのであり、テキストの構造的なメディア性といった研究と相補的な関係にあるべきだと考えられる。

こうした複眼的な観点の研究は、例えばナラトロジー研究の領域でデヴィッド・ハーマンが *Story Logic, Problems and Possibilities of Narrative* でまとめたように、現在でも行われてはいる。しかし、ミシェル・フーコーがフランス哲学学会で行った「作者とは何か？」²⁾と題された講演で、ロラン・バルトの「作者の死」に反論し、その直後に『知の考古学』で発展させた言説と言表に関する考察は、まさに複数のテキストからなるテキスト現象がいかにして可能になるかを扱っており、現在のテキスト研究を先取りした研究であったということが出来る。無論フーコーが『知の考古学』の中で対象としているのはテキストではなく「言表 énoncés」ではあるが、その考察において複数の「言表」がいかにして互いに連携しあうのかという疑問に一つの有効な説明を与えている。

そこで本論では、主にフーコーの『知の考古学』を取り上げ、作品における「言説」と「言表」という概念を整理しつつ、これらの概念が空間性において特徴付けられていることを明らかにするものである。

テキストを空間性において定義づけることにより、前述した3つのテキスト研究のアプローチを有機的に組み合わせることが可能になるのであり、テキストの空間性という理解が今後のテキスト研究を新たに基礎づける一つの可能性であると考えている。

1. 「作者とは何か？」におけるテキストの概念

『知の考古学』におけるフーコーの関心は、序説において述べられているように、歴史学が史料という個別で非連続的な複数のドキュマンを連続性の中に位置づけられた複数のモニュマンに変換するのは反対に、共時的な「モニュマンの内在的記述 la description intrinsèque du monument」³⁾によって複数のモニュマンに一つの連続性を与えることにある。いいかえれば、構造主義的な分析が個別のテキストを対象とした分析にとどまっていたのに対して、それらの分断されたテキストを結びつけ「連続体 continuité」と見なす必要性を前提としているのである。この前提に立脚した上で、フーコーは『知の考古学』に至るまでの主著である『狂気の歴史』、『臨床医学の誕生』、『言葉と物』という3つの作品の中で展開した分析とその手法について「多くの訂正と内省

的批判 pas mal de corrections et de critiques internes」⁴⁾を加えつつ、ドキュマン自体のもつ規則性とその「形成＝編成 formations」を可能にする諸条件を析出しようと試みているのである。フーコーが「考古学」ということばを「歴史」に代えて用いているのは、この学問が、「矛盾を、言説のあらゆるレベルに同じ仕方で行使される一つの一般的機能として扱うことをしりぞける [L'archéologie] renonce donc à traiter la contradiction comme une fonction générale s'exerçant, de la même façon, à tous les niveaux du discours」⁵⁾からであり、このことからフーコーの目論見が、一つのテキストを対象とした考察を積み重ねることによって一般的な原理の構築を目指す、そうした典型的な構造主義的観点とは一線を画しているということを確認できる。

ところで、フーコーによって「考古学」と名づけられたこの試みについては、『知の考古学』の出版と同じ年の2月にコレージュ・ド・フランスにおいてフランス哲学会主催の研究会で行われた「作者とは何か？ Qu'est-ce qu'un auteur?」と題された講演の中でも既に言及されていることを確認することができる。これら二つのテキストを詳細にわたって比較・検討するためには、より多くのページが必要になるが、本論では「作者とは何か？」の中で問題提起されていることを簡単にまとめることで当面のところ満足したい。

講演の冒頭でフーコーは次のように述べている：

Alors, me direz-vous, pourquoi avoir utilisé, dans *les Mots et les Choses*, des noms d'auteurs? Il fallait, ou bien n'en utiliser aucun, ou bien définir la manière dont vous vous en servez. Cette objection-là est, je crois, parfaitement justifiée : j'ai essayé d'en mesurer les implications et les conséquences dans un texte qui va paraître bientôt ; [...]. Voilà le premier volet d'un travail entrepris il y a quelques années, et qui est achevé maintenant.⁶⁾

『言葉と物』において「作者の名前」を気軽に引用してしまったことを批判的に反省しつつも、「近く出版される予定の著述」や「完成した仕事[...]の第一部」としてフーコーが言及しているのが、本論で主として取り上げることになる『知の考古学』なのである⁷⁾。このことから、フーコーの問題意識が二つのテキストにおいて共通していると考えられることは蓋然性があるだろう。そこで『知の考古学』を考察する前にコレージュ・ド・フランスでの講演をとりあげ、そこで展開される議論に目を向けてみることにしたい。

講演の冒頭においてフーコーは4つの問題提起を行っている。すなわち、「作者名 le nom d'auteur」、「所有関係 le rapport d'appropriation」、「帰属関係 le rapport d'attribution」、「作者の位置 la position de l'auteur」である。

ところで、こうした問題提起の背景にあるのはエクリチュールという概念の登場であるとフーコーは述べる。エクリチュールという概念の登場以降、批評は作者への照合を

不要のものと考え、作者の不在という新しい事態を正当化するに至った。その結果、書くという動作も書く主体の意図も批評においては考察の対象から逃れ、その代わりにあらゆるテキストの一般条件についての考察だけを進めることができるようになったのだとし、この概念に一定の有効性を認めている。しかし、フーコーは作者が実在するという事実は明らかに存在しており、エクリチュールという概念は単にその事実を目をつぶることでむしろ作者の特権をア・プリオリな保護の元に保全するという危険を冒しているのだと述べ、名指ししているわけではないもののロラン・バルトの「作者の死」と題された批評やエクリチュールの概念を暗に揶揄しているのである。こうした背景からフーコーは作者の死の後にある「作品」と作者の関係を再検討することが重要であると述べ、前述した4つの問題提起を行っているのである。

そこで、4つの問題提起が講演の中でどのように考察されているかを簡単に確認しておくことにしよう。「作者名」に関するフーコーの議論は、作者名とは単純に個体を指示するだけの機能を有するだけではなく叙述される場合もあると指摘する。フーコーは「アリストテレス」といって『分析論』の作者」とか「存在論の創始者」と説明できることを一例としてあげている。ここから「作者名」には「指示」機能と「叙述」機能とが共存しておりそれらが協働して「作者の機能」となっていると指摘する。これら2つの機能はすべてのテキストにおいて安定して働くわけではないとされる。フーコーは、フランスの詩人アルチュール・ランボーが紛失したとされている『精神の狩猟』を例に、その作品が実はランボーが書いたものでなかったとしても「ランボー」という作者名の持つ意味が完全に変わってしまうわけではないことを例にあげる。フーコーにとって「指示」と「叙述」という2つの「作者の機能」はテキストに対して多様に働くものなのである。またフーコーは「作者の機能」を備えていないテキストも実在することも認めており、テキストが「作者の機能」を備えている場合にわれわれはそれを「作品」と呼ぶのだと定義づけている。

作者とテキストあるいは作品との「所有関係」については、現在においてテキストが作者の所有の対象物となっていることを認めつつも、歴史的には「刑罰的所有」といい得るような二次的なものであったことを述べる。それが18世紀末から19世紀初頭にかけて特に文学を中心としたテキストにおいて制度化されたと指摘する。その上で科学論文と文学テキストとが歴史的に見て作者名をどのように扱ってきたかを概説した後に、「キアスム *chiasme*」ということばを用いて、中世において作者名だけが科学論文の価値を担保していた状況が17世紀から18世紀にかけて変化し、体系的全体との整合性が論文の価値を保証することになったのであり、こうした現象は文学テキストにおいて正反対のベクトルをもつ変化として考察することができると説明している。このことからフーコーは作者とテキストとの所有関係はテキストにとって本質的な関係ではないことを主張している。

続いてフーコーは自ら提起した「帰属関係」の問題を取り上げ、作者名とテキストを帰属という関係性でとらえることが誤っていると指摘する。この主張の論拠としてあげられているのは、文学批評においてもキリスト教的伝統においてもテキストの中に作者を再発見することで作者の聖性を証明する点で共通しているという考察である。フーコーによれば、聖ヒエロニムスは『偉人伝』において複数の言説を一人の同一の作者に帰属させるために4つの基準を設けている。一つは「価値の基準」であり、複数のテキストのうちで他のものより劣っているテキストは同一の作者に帰属しないとされる。次は「整合性の基準」であり、あるテキストが同じ作者の他の作品と内容の点で矛盾する場合、そのテキストは同一の作者には帰属しないとされる。さらに「文体上の均一性の基準」であり、文体が異なっている場合に、テキストは同一の作者に帰属しない。そして最後に「時間的整合性の基準」であり、テキストが作者の死後の人物を引用している場合はそのテキストは同一の作者に帰属しない。これら4つの基準は、近代文学批評における次の態度に合致しているとフーコーは指摘するのである。すなわち、作者の伝記や社会的所属あるいは根源的投企を探求する文学批評や、作者をエクリチュールの一の統一性の原理だと考えテキスト間の差異を生成や成熟や影響によって説明する文学批評や、あるいは作者の思想や欲望や無意識を対象に研究することでテキスト間に見られるいくつかの矛盾が解消され得ると考えたり、さらには作者に帰属すべき全てのテキストの中で作者という価値が同一性を保ち、常にテキストによる表現の中心にあると考える文学批評は、聖ヒエロニムスの提示する4つの基準に厳密に1対1の関係を有しているわけではないにせよ、基本的には作者をテキストに帰属させることにより作者の問題を解決したと考えているのである。作者をテキストに帰属させるという考え方は、反省によってのみ導き出されるものである以上、二次的なものでしかなく、テキストと作者との関係の本質をとらえたものと見なすことはできないのだとフーコーは主張する。

以上のように、自らの提起した3つの問題点の一つ一つに批判を加えながら、フーコーが講演の中心的主題に位置づけているのは、「作者の機能」がテキストに存在する場合に（というのも、全てのテキストにそうした機能が存在しているわけではないとフーコー自身も認めているからであるが）、その機能とはどのように記述されるのかという問題である。この問いに対してフーコーは4つの機能を結論として提示している：1) 作者の機能はテキストを限定し分節する法的・制度的システムに結びついていること、2) 作者の機能はテキストによっても時代によっても社会によっても同じではないこと、3) 作者の機能はテキストと自然発生的に結びつけられるものではなく、一連の処理の結果として結びつけられるものであるということ、4) 機能としての作者は単純な個人を指すものではなく、複数の自己、分類を異にする複数の立場や主体を同時に成立させることができること。このように、フーコーは「作者」という概念が、個別のテキストに結びつけられることなくテキストに内在する自律した機能として考察し得ることを

主張している。

Quels sont les modes d'existence de ce discours? D'où a-t-il été tenu, comment peut-il circuler, et qui peut se l'approprier? Quels sont les emplacements qui y sont ménagés pour des sujets possibles? Qui peut remplir ces diverses fonctions de sujet?⁸⁾

講演を締めくくるフーコーのこの問いかけに見ることができるように、「機能としての作者」に関わる分析は、これまでになされてきたようないかにして一主体の自由がテキストの中に入り込みそれに意味を与えることができるのかという問いかけをやめて、いかにして、いかなる条件に基づいて、いかなる形態の元に、主体と呼ぶことができるような何かがテキストの中に現れるのかを問うことであり、さらにはテキストの中でそうした主体がどのような位置を占め、どのような機能を果たすのか、そしてそれはどのような規則に従っているかと問題設定をすることなのである。

こうした作者の機能あるいは機能としての作者という問題設定は、フーコー自身が「完成したばかりの [...] 第一部」をなすと述べていたように、『知の考古学』においてフーコーが展開した考察にその多くを負っているはずである。本稿の次章では、『知の考古学』で主たる考察の対象となっている「言説」と「言表」との関係を辿りなおすことにしよう。

2. 『知の考古学』における「言説」と「言表」

フーコーは『知の考古学』の中で「言説 discours」と「言表 énoncé」という二つの用語を中心にして、自己批判的に新たな方法論を理論立てようとする：

Peut-on admettre, [...], la distinction des grands types de discours, ou des formes ou des genres qui opposent les unes aux autres science, littérature, philosophie, religion, histoire, fiction, etc., et qui en font des sortes de grandes individualités historiques? Nous nous sommes pas sûrs nous-mêmes de l'usage de ces distinctions dans le monde de discours qui est le nôtre. A plus forte raison lorsqu'il s'agit d'analyser des ensembles d'énoncés qui étaient, à l'époque de leur formulation, distribués, répartis et caractérisés d'une toute autre manière: [...].⁹⁾

この引用から分かるように、言説は学問領域やジャンルと同等に扱われわれわれの世界を構成するものであると考えられている。その一方で、言表は各ジャンルにおける分析対象なのであり、分析の現在とは全く切り離された時期に定式化され、流通させられ、分配され、特徴付けられたものとして、存在しているものとされている。換言すれば、

言表と言説とは無関係に存在するものであり、言説はそうした言表を分析対象として扱った結果としての一つの全体ということになる。本章では言説と言表という二つの異なる概念がどのようなものとして扱われているのかについて確認し、それらの外延を明確にしたい。

まずフーコーは、言説を「形成＝編成 formation」において特徴づけられるものであり、規則性と統一性をもつものであると考える。フーコーの主張する言説の統一性とは何か。フーコーによれば、伝統や影響、発展や進化、心性や精神などの観念は「通常あらゆる検討以前に認められている集合、はじめからその有効性が認知されている結びつき *ces groupements que d'ordinaire on admet avant tout examen, ces liens dont la validité est reconnue d'entrée de jeu*」¹⁰⁾であって言説の統一性と考えることはできないし、さらに「言説の大きな類型の区別、相互に対立し合う科学、文学、哲学、宗教、歴史、創作などの諸形式或いは諸ジャンル *la distinction des grands types de discours, ou celle des formes ou des genres qui opposent les unes aux autres science, littérature, philosophie, religion, histoire, fiction, etc.,*」¹¹⁾あるいは「書物や作品の統一性 [les unités] du livre et de l'œuvre」¹²⁾といった既成のまとまりもまた、言説の統一性とは全く異なったものだと言主張する。さらにフーコーは言説の統一性についてもう一つの注意をわれわれに与えている。それは、言説の秩序の中に現実の出来事が入り込むことを認めず、出来事の彼方に「秘密な起源がある——きわめて秘密かつ始源的なので、それ自身においてはそれは完全にとらえられない *il y a toujours une origine secrète — si secrète et si originaire qu'on ne peut jamais la ressaisir tout à fait en elle-même*」¹³⁾という考えを退けることであり、さらに「すべての明白な言説は、ひそかに、すでに述べられたことの上に基づいている *tout discours manifeste reposerait secrètement sur un déjà-dit*」¹⁴⁾と見なさないことである。このように否定によって定義づけられる言説であるが、フーコーの主張は現実に存在しているさまざまな「言説＝出来事 *événements discursifs*」¹⁵⁾だけを研究対象としてあるがままに取り上げるべきであるという点で一貫している。そして、この言説の統一性に関するフーコーの主張は、われわれが本稿の最初に確認した「作者とは何か？」で展開されていた主張、すなわち作者とはテキストに外在する個人名やテキストの所有者などではなく、テキストに内在する機能としての主体であるという主張に対応しているといえることができる。

しかし「テキスト」という概念は『知の考古学』における「言説」と等価であると見なすことはできない、というのも、フーコーの考える限りにおける言説とは、「あらゆる有効な言表の総体（それらの言表は当然語られ、書かれていなければならない） *l'ensemble de tous les énoncés effectifs (qu'ils aient été parlés et écrits)*」¹⁶⁾と等価なものとされる。すなわち、声によって話されたり文字によって書かれたりしたものとしての言表が複数集まることによって言説が成り立っているとフーコーは述べるのである。しかも、この意味における言説は、一つのシステムとしての言語が無限の言語運用を許すのとは

異なり、「常に有限で、現実的にただ定式化された言語的継起によってのみ制限されている総体 l'ensemble toujours fini et actuellement limité de seules séquences linguistiques qui ont été formulées」¹⁷⁾であるとされる。約言すれば、言表とは記号システムの一つとしての言語によって表現されたものであり、現実の出来事と見なすことができるものであって、記号システムを用いた表現一般を「テキスト」と呼ぶのであれば、フーコーのいう「言表」こそがまさに「テキスト」だと考えることができるといえよう。一方で言説はそうした言表が複数集まることによって成立するものであり、既存のジャンルや概念規定からは逃れるべきものなのであって、その意味において「作者とは何か？」において用いられている「テキスト」と『知の考古学』において用いられる「言説」とは異なっているということができるのである。

以上見てきたように、フーコーに従えば、言説の統一性とは複数の言表が集まることによって保証されるのだが、もう一つ重要なことは集まった言表は無秩序に存在しているわけではないということである。既存の統一性を退けて言説という新たな統一性を措定することによって、「言表相互の間の諸連関 relations entre des groupes d'énoncés [...] établis」¹⁸⁾、「言表群の諸連関 relations entre des énoncés ou des groupes d'énoncés」¹⁹⁾という新たな規則性が考察対象として現れる。この言説の統一性を支配する言表の連関に関する規則性について、「対象 objets」、「言表の諸態様 modalités énonciatives」、「概念 concepts」、「戦術 stratégies」という4つのシステムをフーコーは提示している。そしてこれら4つのシステムによって体系化される言説の統一性の規則を「形成＝編成のシステム les systèmes de la formation」（フォーメーション・システム）と名づけている。これらのシステムは単なる「並置、共存、異質的な諸要素の相互作用」によって結びついているのではなく、言説が実践されることによって初めて互いの関連性を成立させるようなものとされる。「対象」のシステムとはある言説が統一性を保持するために言表を画定するためのシステムをさす。「言表の諸態様」のシステムとは、「作者とは何か？」でまとめられていた言表の主体（故に複数の非連続的な主体）及び言表の制度や言表の発せられた場所などに関わっている。「概念」のシステムとは、諸言表がどのようなフィールドにおいて生起するか、あるいはどのような言表と共存しているか、さらには一つの言表がどのように変化していくかといった観点を提供する。最後に「戦術」のシステムとは、言説が諸言表を類型化したり諸言表から自らを理論化する際の諸条件を規定するものである。これら4つのシステムは言説自体に内在しており、諸言表を集めたものとしての言説の分析を行うためには、各システムについて記述することが要求されるのである。

言説すなわちフォーメーション・システムを記述することが伝統的な言説の記述と異なることを強調する際に、フーコーはフォーメーション・システムの特徴を3つ挙げている。第一に、前述したようにこれら4つのシステムは独立しているのではなく互いに

連携し合うことで一つの言説の成立を保証しているが、それは決して無秩序な連携などではなく、「諸対象の第一の差異化から言説的戦術の形成＝編制までの間には、諸連関のあらゆる階層秩序が存在する *de la différenciation primaire des objets à la formation des stratégies discursives, il existe toute une hiérarchie de relations*」²⁰⁾とフーコーは述べる。すなわち、一つの言表から出発して複数の言表が一つの言説に統一されるまでにはさまざまな段階があり、それらの各段階もまた連携しあっているのである。こうした上下の階層秩序の存在と共に、フーコーがフォーメーション・システムについて強調するのは、それが時間的なシステム群だということである。ここで時間的というのは、フォーメーション・システム自体は静的ではなく動的な、すなわち時間的変化を伴うシステム群だということである。システム群の変化は2段階で達成され、諸言表が変化しているにもかかわらず同一のフォーメーション規則をあてはめることによって諸言表の生起する領域が差異化され、それによって言説自体も変化を蒙ることになるのである。そして最後に、フォーメーション・システムが時間的変化を許容する以上、記述されたシステム群は絶対的・最終的なものではあり得ず、「最後の体系的形態を可能にする諸体系 *des systèmes qui rendent possibles les formes systématiques dernières*」²¹⁾であり「前終局的諸規則性 *des régularité préterminales*」²²⁾であるという特徴が指摘されているのである。

このようにフーコーの議論を簡単に振り返って分かることは、フーコーが『知の考古学』において「言説」と呼ぶのは、表現行為の結果としての「言表」が複数集まってできるものであり、それがフォーメーション・システムと呼ばれる規則性を伴い統一性を保ちつつも変化し得るような、そうした総体のことだということである。

その一方で「言説」を構成する要素として捉えられた「言表」はどのようなものとして考えられているのだろうか？フーコーが言表について繰り返し強調していることは、言表とは単なる記号や論理学や言語学やスピーチ・アクト理論の分析対象とは異なる「独自の様態 *mode singulier*」²³⁾を有しているという点である。フーコーは次のような例を挙げている。論理学においては、「*Personne n'a entendu.*」と「*Il est vrai que personne n'a entendu.*」という2つの表現は1つの命題と見なすことができるが、言表としては異なるものと見なさざるを得ない。文を厳密に定義することはできないにしても、植物種の分類図表や数式を文と見なすことができないのに対して、それらを言表と見なすことはできる。最後にスピーチ・アクト理論が扱うのは一つの発話ではなく一連の発話であるが、その一方で言表はその発話の一つ一つをさすものである。このように例を挙げて反論することで、フーコーは言表を定義づけている。

その上で、言表の「独自の様態」についても4つの「機能 *fonctions*」²⁴⁾という観点から説明している。最初はフーコーが言表の「関説性 *référentiel*」²⁵⁾と呼ぶ機能である。言語学における語、論理学における命題、スピーチ・アクト理論における文などのように言表と似た考察単位は存在している。そして、それら既存の学問領域における考察単位

は、言語学においては名詞とそれが指示するものとの関係として、論理学においては命題とそれが指示するものとの関係として、スピーチ・アクト理論においては文とその意味との間の関係として、それぞれ理解することができる。これは *signifiant / signifié* あるいは *référant / référé* という連関において考察していることになる。しかし、例えば論理的観点から「*La montagne d'or est en Californie.*」という命題が指示物を欠いているという理由で検証することができずとされてしまうのに対して、現実世界に指示物がなくても言表という観点からすれば可能世界を指定することもできるわけであり、このことから言表が言語学や論理学やスピーチ・アクト理論における研究対象の単位とは異なった「独自の様態」を有していることが分るとフーコーは説明する。さらに言表の「独自の様態」は指示するものと指示されるものとの関係が、*signifiant / signifié* といった1対1の関係に集約され得るものではなく、言表はその「相関物 *corrélat*²⁶⁾として「諸領域の総体 *un ensemble de domaines*」²⁷⁾を持つとされる。そうした領域としては、物質的な対象の領域、空間的な対象の領域、時間的な対象の領域などが挙げられているが、これらの領域については次章で再び取り上げることにしよう。

第2の機能は、言表の主体に関するもので、ここでは前章において既に確認した「作者とは何か？」の論点に結びつく議論が展開されている。すなわち、言表の主体とは言表に外在する主体ではなく一つの機能として言表に内在するという主張である。フーコーは一人称小説の例を取り上げ、一人称小説における言表の主体は決して「作者」ではないことを指摘する。その上で、言表の主体を内在的にとらえ得るのは、小説という特殊なジャンルに固有の現象ではなく、同様の現象は数学論文においても確認することができる。フーコーは自らの言表主体という考え方について、言表に外在する作者からあらゆる点で区別されるべきだと結論づけることはできずと、一定の留保を示してはいる。しかし最終的には、言表の主体とは可変的でありつつも自己同一性を保持し続けるものであり、「言表としてのすべての定式的表現を特徴づける一つの次元 *une dimension qui caractérise toute formulation en tant qu'énoncé*」²⁸⁾であるとしており、言表の主体を言表に外在する作者に結びつける考え方を基本的には否定しているといえよう。

第3の機能として言表の各々に「結合された一領域の存在 *l'existence d'un domaine associé*」²⁹⁾が結びついていることが指摘される。フーコーはこうした「一領域」を「余白 *marges*」³⁰⁾と呼び、それが一般的にコンテキストと呼ばれるものとは異なると規定する。すなわち、コンテキストが「現実的、あるいは言語的なものである *réel ou verbal*」³¹⁾一方で、余白は「一つの定式的表現を動機づけ、その意味を決定する状況あるいは言語の諸要素の総体に関するもの *l'ensemble des éléments de situation ou de langage qui motivent une formulation et en déterminent le sens*」³²⁾だとされる。あるいはコンテキストが「さまざまな定式的表現の間のいっそう一般的な関係を基礎とし、一つの言語の網

全体を基礎として *sur fond d'un rapport plus général entre les formulations, sur fond de tout un réseau verbal*³³⁾ 決定されるのに対して、余白はコンテキストのように客観的に構築することができず「他のすべての定式的表現の中での一つの定式的表現の位置、規約、および役割に応じて *selon la position, le statut et le rôle d'une formulation parmi toutes les autres*」³⁴⁾のみ決定されるものであり、可変的であるとされるのである。この説明の中でフーコーは「言表」ということばではなく「定式的表現」という表現を用いているが、このことばの選択には複数の言表が互いに余白を通じて連関しながら全体としてフォーメーション・システムとしての言説の中に組み込まれていくという考え方が含意されていることはいうまでもない。ところが、説明される言表の機能的能動性を論証するための明確な根拠は示されていないのであり、その点においてフーコーの述べる「余白」という考え方は必ずしも明確にされているとはいえないように思われる。いずれにせよ、フーコーが指摘する言表の余白という機能は、コンテキストのように客観的に構築されるものではなく、各言表が個別に持っている「余白」と呼ばれる領域によって、言表同士が互いに結びつくことで「一つの系あるいは総体の一部をなし、他のさまざまな言表中で一つの役割を演じ、他のさまざまな言表の上に基づき、かつそれらから自己を区別する *toujours un énoncé faisant partie d'une série ou d'un ensemble, jouant un rôle au milieu des autres, s'appuyant sur eux et se distinguant d'eux*」³⁵⁾ ような言表の機能として考えられるのである。換言すれば、各々が個別性をもつ言表が他の言表と結びつくことができるのは「余白」という機能が各言表にあらかじめ備わっているからであり、そうした結びつきこそが言表というフーコー的な考察対象の特性であるととらえられているのである。

言表に備わった最後の機能としてフーコーは「物質的存在 *une existence matérielle*」³⁶⁾を挙げている。言説に対するフーコーの考え方も確認することができたが、フーコーは言説や言表の実践的あるいは現実的な側面を忘れてはいない。フーコーにとって抽象的な言表というのは存在しないのであり、言表が実在するためには必ずそれが物質性を有して実在していることが条件となるとされるのである。フーコー自身認めているように、言語学や論理学においても物質性という論点が常に考察対象として存在してきた。しかし、先行研究において言表の物質性は「一つの言表が一つの実体、支え、場所、日付を持つことである *il faut qu'un énoncé ait une substance, un support, un lieu et une date.*」³⁷⁾ととらえられてきた。つまり、言表の物質性ということばには、言表が単に物質的な支えをもって世界に存在していることだけではなく、その事実が付随して場所などの空間的性質も日付などの時間的性質も有していることが条件として与えられてきたのである。このことから「一つのテキストを暗記するとき、一回一回の暗誦は一つの言表を生じさせるものであろうか？ それとも繰り返されるものは同一のものと見なすべきであらうか？ *Quand on apprend un texte par cœur, chaque récitation donne-t-elle lieu à un énoncé, ou faut-il considérer que c'est le même qui se répète?*」³⁸⁾といった問いが正当性を持つことに

なり、結果として先行研究では言表の物質性の問題を「言表の同一性 l'identité de l'énoncé」³⁹⁾という問題と等価なものとして扱ってきたのだとフーコーは指摘する。しかし、フーコーにとって言表の物質性は空間的・時間的同一性によって規定されるべきものではない。それは、フーコーによって言表の主体が可変的なものとして捉えられていたのと同じく、「変容可能な、相対的な、そして常に問い直し得る modifiable, relatif et toujours susceptible d'être remis en question」⁴⁰⁾ものでありかつ「言表の同一性は、物質的諸制度の複雑な支配とともにかわる l'identité [d'une énoncé] varie avec un régime complexe d'institutions matérielles」⁴¹⁾ような「事物あるいは対象の規約によって規定される définie [...] plutôt par un statut de chose ou d'objet」⁴²⁾ものであるとされる。このような言表の物質性を説明するためにフーコーは憲法や遺書、宗教的啓示などのテキストを取り上げ、これらのテキストは異なる物質性の元で反復されることでその同一性が失われるのに対して、ボードレールの『悪の華』のように異なる物質性を有していても同一性が失われないテキストもあると述べ、言表の物質性は「空間的＝時間的局在化に関わるよりも、制度の秩序にかかわる l'ordre de l'institution plus que [...] la localisation spatio-temporelle」⁴³⁾と主張している。制度の秩序として言表の物質性を捉えることによって、言表の同一性の問題は言表の個別性を見いだすために出される問題としてではなく、むしろ言表の「書き換えや転写の可能性 des possibilités de réinscription et de transcription」⁴⁴⁾を規定する問題として立ち現れることになるのである。それでは言表の制度的な同一性はどのように説明できるのか？ フーコーはそれが「条件と限界という第二の総体 un second ensemble de conditions et de limites」⁴⁵⁾に従属していると述べる。「条件と限界」とは、「その真只中にその言表が姿を現わす他の言表の総体、そのなかでは言表が用いられ適用される領域、言表が演ずべき役割あるいは機能、などによって、言表に課せられているさまざまな条件や限界 [des conditions et des limites] qui sont imposées [à un énoncé] par l'ensemble des autres énoncés au milieu desquels il figure, par le domaine dans lequel on peut l'utiliser ou l'appliquer, par le rôle ou les fonctions qu'il a à jouer」⁴⁶⁾であるとされる。これは、言表の機能の第3に挙げられていた「言表の余白」と関係しており、ある言表はその言表の「余白」を成立の条件としているため、その「余白」から外れて実現されることがないことを意味している。つまり、言表はみずからの「余白」に依存している以上、その「余白」次第で言表の同一性は変化するのであり、それが逆説的に言表の反復可能性の源泉になっているのである。

フーコーは以上のように言表の4つの機能を提示した後で次のように結論づけている：

[...] l'énoncé, en même temps qu'il surgit dans sa matérialité, apparaît avec un statut, entre dans des réseaux, se place dans des champs d'utilisation, s'offre à des transferts et à des stratégies où son identité se maintient ou s'efface.⁴⁷⁾

世界に生まれた言表は物質性という制度的秩序に規定されると同時に、他のさまざまな言表と「余白」によって結びつき、いわばネットワーク化するのである。この言表群のネットワークは、決して静的で安定したネットワークではなく、ある戦術のもとに統御されることでそれと分かる同一性を保ちつつも常に可変的なものである。

本章においてわれわれは、フーコーが言説を言表の集合として見なしていたことを確認し、言説と言表とを対象にそれぞれの特性を考察していることを確認した。次の章においては空間性という考え方を軸にフーコーの2つの概念を再検討し、テキスト研究における空間性の重要性を確認したい。

3. 言説と言表の空間性

言説と言表との空間性について検討する前に、「言表」と「テキスト」の関係について整理しておく必要があるだろう。講演「作者とは何か？」の中でフーコーが物語や詩といった言語表象を表すときには、「エクリチュール」と「テキスト」の両方が用いられる。「エクリチュール」ということばは「遊び」や「死」といったことばに結びつけられて用いられており、そうした用語の選択からもまたフーコーが「かつては義務として不死性をもたらすべきものであった作品が、いまでは、自分の作者を殺す権利、自分の作者の殺害者であるという権利を受け取ってしまったのです *L'œuvre qui avait le devoir d'apporter l'immortalité a reçu maintenant le droit de tuer, d'être meurtrière de son auteur.*⁴⁸⁾と述べていることから、本稿第1章で示唆したように、暗にロラン・バルトの「作者の死」を念頭に置いて否定的に用いていることを容易に想像することができる。一方で「テキスト」は、「ガリレオのテキスト」や「マルクスのテキスト」などのように固有名詞と結びつけられて用いられているだけではなく、「ひとはテキスト自体に、素裸のテキストに立ち戻るのであり、といて同時にまた、テキストのなかに空洞として、不在として、欠落として印されているものへと立ち戻るのです *on revient au texte même, au texte dans sa nudité, et, en même temps, pourtant, on revient à ce qui est marqué en creux, en absence, en lacune dans le texte.*」⁴⁹⁾と言語表象一般を表すためにも用いられている。ところで、本稿第1章を思い出すと講演の中でフーコーが扱っていたのは複数のテキストにおける機能としての作者という問題ではなく、単一のテキストにおける機能としての作者という問題であった。そして、前章で確認したように言説は複数の言表がフォーメーション・システムに依拠しながらネットワーク化して存在するものだったのに対して、言表はシステムに組み込まれてネットワーク化する単一の表象と考えられていた。確かに『知の考古学』においては「テキスト」と「言表」は異なるものと規定されているが、それでも尚いくつかの条件の下でわれわれはフーコーにおける「言表」を「テキスト」といい換えることができるだろう。それ故、本章以降では「テキスト」

ということばをフーコーが『知の考古学』において「言表」と呼ぶものを含意していると考えて用いることにする。そして、「言説」の概念については、フーコーに従ってそのまま「言説」と呼ぶことにする。

本章では言説とテキストという2つの概念を空間性という観点から再検討するが、前章においてフーコーがテキストの物質性を考察した際にわれわれは既に、テキストの空間性はテキストの物質性の概念に含まれてはおらず、そうした観点を離れたところで分析対象とされるのがテキストであると述べていたことを思い出すことができる。言語学や論理学といった先行研究に従って、物質性を構成する要素として空間性が「一つの实体、支え、場所、日付」を持つと考えることは、テキストの同一性に関して大きな問題を提起する結果となった。フーコーはそうした伝統的な物質性のとらえ方を捨て、可変的で相対的な諸制度として物質性をとらえ直すと共に、そうした諸制度はテキストが属す領域あるいはジャンルごとに異なっていると考えるべきであると指摘する。こうした観点を採用することによって「書き換えや転写」といった事態を眼前にしてもテキストの同一性を問題視する必要はなくなるのだと指摘していた。このフーコーの説明には、しかしながら、言説とテキストという異なる視点が混在しているように思われる。すなわち、1編のテキストだけを取り上げてその空間性や時間性の観点からテキストの物質性を規定するだけではテキストの物質性の説明として不十分であることを認めるとしても、1編のテキストが「制度の秩序」に従うと説明することは、既にそのテキストが予見可能な何らかの制度に属していると認めることになるからである。別のいい方をすれば、1編のテキストに関して「制度の秩序」ということがいえるのであれば、そのテキストは分析対象となる前に何らかの秩序に従っていることが断定されていなければならないことになりはしないだろうか。フーコーに従えば、言説とはテキストの集合体ではあるが、それらをまとめ上げるフォーメーション・システムは動的なものとして時間的変化を伴うシステムであり、テキストを統括するシステムの規則群も「前終局的諸規則性」と名付けられて決定的なものではなく可変的であるとされていた。言説のシステムがいかにも可変的であろうとも、テキストはシステムに先行して存在していなければならないのであり、決してその逆ではないだろう。

テキストと言説に関わる曖昧さは、實在レベルにおけるテキストと言説の不可分性を明らかにしているのかもしれない。しかしわれわれとしてはこの曖昧さの原因を、テキストや言説の存在論に帰すことで満足するのではなく、フーコー自身のテキストに立ち戻って考えておきたい。すなわち、われわれが今問題にしている曖昧さは、フーコーがフォーメーション・システムの性質を必ずしも明確にしなかったことに起因しているように思えるのである。このことについては既に機能的能動性と呼びすでに確認したことではあるが、約言すると、フォーメーション・システムが、自律的かつ能動的にテキストに働きかけテキストを統御するようなシステムなのか、それともテキスト及び言説を

対象として分析を行う第三者としての主体が指定されておりその主体がシステムを用いてテキストを言説へとまとめ上げるのか、これらの点が必ずしも明らかにされていないのである。前者のモードで言説をとらえるのであれば、テキストに内在する機能としての「余白」がインターフェースのようなものとして働き、他のテキストとの結びつきはこのインターフェースを通して行われることになるのであり、テキスト群のネットワーク化すなわちテキストの言説化は必然的帰結として理解されなければならない。このことは換言すればテキスト群の固定化された静的なネットワークを生むことになるだろう。後者のモードで言説をとらえるのであれば、個別のテキストが持つ「余白」の性質はテキスト及び言説の分析を行う主体によって恣意的に操作される可能性が出てくるのであり、その意味においてテキスト群のネットワーク化は、最悪の場合、分析主体の恣意的歪曲を蒙りかねないのである。

しかし前章において確認したように、フーコーがこうした無秩序状態のネットワーク化を想定していたと考えることはできない⁵⁰⁾。というのもフーコーはフォーメーション・システムが連携し合いながら無段階の階層秩序を構築していると考えていたからである。にもかかわらず、われわれはフーコーが後者の立場をとっているように思えるのである。

C'est que *les différents niveaux* ainsi définis ne sont pas indépendants les uns des autres. On a montré que les choix stratégiques ne surgissent pas directement d'une vision du monde ou d'une prédominance d'intérêts qui appartiendraient en propre à tel ou tel sujet parlant; mais que leur possibilité même *est déterminée* par des points de divergence dans le jeu des concepts; on a montré aussi que les concepts *n'étaient point formés* directement sur le fond approximatif, confus et vivant des idées, mais à partir des formes de coexistence entre les énoncés; quant aux modalités d'énonciation, on a vu qu'*elles étaient décrites* à partir de la position qu'occupe le sujet par rapport au domaine d'objets dont il parle. De cette manière, il existe *un système vertical de dépendances* : [...]⁵¹⁾

この引用においてフーコーは、言説の実践が4つのフォーメーション・システムの連関を生み出すことを説明しているのであるが、その説明において引用文中にイタリックで示したように「On a montré que ..」以下の従属節の動詞がほぼすべて受動態におかれていることにわれわれは気づく。すなわち、これらの連関は決して言説の実践を通して各テキストが能動的に作動させる連関としてとらえられているのではなく、むしろこれらの連関は受動的に構築されるものとして説明されているのである。いいかえれば、テキストの連関は第三者としての分析主体が4つのフォーメーション・システムを適用することで初めて明示されるのである。

いずれにせよ、少なく見積もっても次のことだけは確かである。すなわち、フーコーにおいてテキストは常に言説というモードでのみ存在しているのであり、1つのテキストの機能を考察する場合でも、常に複数のテキストが問題となっているのだ。そして、フーコーがテキストあるいは言表と述べる時、そこには常に複数のテキストや言表の存在が含意されているのであり、フーコーの関心が1編のテキストの構造といったレベルにとどまるものではなく、複数のテキストによる言説化あるいはテキストのネットワーク化の問題にあったことは、以上の考察からも明らかであろう。

そうであって尚、言表あるいはテキストの空間性がフーコーによって完全に否定されていると見なすことも残念ながらできないのである。テキストの空間性は、言表の最初の機能として言表の関説性が「諸領域の総体」を「相関物」として持つと説明された際にも言及されているからである⁵²⁾。「La montagne d'or est en Californie.」論理学的観点からするとこの言表が指示する対象は存在しなかったが、言語学の観点からすれば統語論的に説明可能であり且つ意味論的に指示するものをもつ。しかし、フーコーによればこの言表の相関物は、「しかじかの諸対象が現われ得る、また、しかじかの連関が指示され得る、諸領域の総体である le corrélat de l'énoncé, c'est un ensemble de domaines où tels objets peuvent apparaître et où de telles relations peuvent être assignées」⁵³⁾とされる。言表の空間性や時間性が言及されるのは、まさにこの文脈においてである。すなわち、このカリフォルニアの金の山塊についての非現実の言表はその相関物として併存するさまざまな領域が列挙されるのであるが、それは「実験的或いは知覚的検証という審級を欠いた虚構的な諸対象の一領域 une domaine d'objets fictifs, dotés de propriétés arbitraire, [...] sans instance de vérifications expérimentales ou perceptives」⁵⁴⁾であり、「空間的・地理的局在化の一領域 un domaine de localisations spatiales et géographiques」⁵⁵⁾であり、「象徴的付属あるいは秘密な類縁性の一領域 un domaine d'appartenances symboliques et de parentés secrètes」⁵⁶⁾などである。つまりここで空間性とされるのは言表の相関物として存在する領域だったと確認することができるのである。結局のところ、言表あるいはテキストの本質的機能について空間性の観点から捉えることをフーコーは認めていないのであり、そのことが確認できた以上、われわれの空間性に関する関心は自ずと言説へと向かうことになる。

フーコーによる言説の説明において空間性ということばが用いられることはない。しかし言説に関するフーコーの記述には、言説の空間的特性を明らかに見て取ることができるのである。実際、既にわれわれが引用したフーコーのことばからもそのことをうかがい知ることができるのであり、例えば「諸連関のあらゆる階層秩序」や「前終局的諸規則性」といったことばには、明らかに上下あるいは前後といった空間的広がりを含意されている。あるいは、注51の引用において確認することができるように、4つのフォーメーション・システムの「諸レベル」や言表間に見られる「依存の垂直的な一つ

の体系」といった表現にも、先に挙げた例と同じく上下の位置関係が想定されていることを容易に読み取ることができるのである。さらには、フォーメーション・システムによって束ねられる前の諸言表は分散した状態と形容されるのであり、ここにおいても空間的な広がりの中に諸言表が存在していることが想定されているのである。

無論、ここで問題になっている空間性とは、決して現実世界において一つの言表やテキストが占める測定可能なしじかの位置でないことはいうまでもない。言説に関して既に見てきたことであるが、言表のそれぞれは注40で引用したように「変容可能な、相対的な、そして常に問い直し得る」ものとして、言説のシステム内に位置づけられ得るテキストの相互関係によって構成される空間だと考えることができるだろう⁵⁷⁾。

おわりに

『知の考古学』におけるフーコーのテキスト論は、本論においてみてきたように言説と言表という2つの概念を中心に展開されている。フーコーはこれらの概念に独自の定義を与え、両概念の関係性を明らかにしようとした。フーコーの議論を概観しながら明らかになったことは、言説が言表を独自のフォーメーション・システムを作動させることで言説としての統一性を獲得しているということであり、言表が関説性、機能としての主体、余白、制度としての物質性という4つの機能を帯びつつ束ねられて言説化されるということであった。別の言い方をすれば、言表をネットワーク化することで言説が形成されるのである。こうしたフーコーの考察は、それ自体として一貫性を持っているが、本論で指摘したように言説が言表自体の自律性から構築されるものなのかそれとも言説や言表に外在する第三者を考えるべきなのかについての考察には、整合性の点で問題がないとはいえなかった。

しかし、フーコーの言説と言表についての考察からわれわれは、テキスト研究においてはテキストを1つだけ取り上げるだけでは不十分であり、対象となるテキストを他のテキストとのネットワークの中に位置づけ直すことが必要になることを学ぶのである。テキストの空間性を強調することは、とりもなおさずこうした位置づけの問題を前景に持ち出すことであり、現象としてのテキストを焦点化することなのである。

注

- 1) Michel FOUCAULT, *l'Archéologie du Savoir*, coll. « Bibliothèque des Sciences humaines », Éditions Gallimard, 1969. (以下、本論ではASと略記する。また、本文中で用いた日本語訳は次を用いた：ミシェル・フーコー、中村雄二郎訳、『知の考古学』、河出書房新社、1981年)
- 2) Michel FOUCAULT, « Qu'est-ce qu'un auteur? », dans *Bulletin de la Société française de philosophie*, 63^e année, n° 3, juillet-septembre, 1969, pp. 73-104 ; repris dans Michel Foucault, *Dits et écrits I, 1954-1975*,

édition établie sous la direction de Daniel Defert et François Ewald avec la collaboration de Jacques Lagrange, coll. « Quatro », Éditions Gallimard, 1994 (éd. de 2001), pp. 817-849. (以下本論では *Qa* と略記する。また、本文中の日本語は次に従った：ミシェル・フーコー、清水徹訳、「作者とは何か?」、『作者とは何か?』、(ミシェル・フーコー文学論集1)、哲学書房、1990、pp. 9-72.)

- 3) *AS*, p. 15.
- 4) *Ibid.*, p. 26.
- 5) *Ibid.*, p. 200.
- 6) *Qa.*, pp. 819-820.
- 7) 日本語訳者である清水徹も「『知の考古学』のこと」と、本文中に明記している。Cf. ミシェル・フーコー、『知の考古学』、p. 17.
- 8) *Ibid.*, p. 840.
- 9) *AS*, pp. 32-33.
- 10) *Ibid.*, p. 32.
- 11) *Ibid.*, pp. 32-33.
- 12) *Ibid.*, p. 33.
- 13) *Ibid.*, p. 36.
- 14) *Ibid.*
- 15) *Ibid.*, p. 38.
- 16) *Ibid.*
- 17) *Ibid.*, p. 39.
- 18) *Ibid.*, p. 41.
- 19) *Ibid.*
- 20) *Ibid.*, p. 97. 強調筆者。
- 21) *Ibid.*, p. 100.
- 22) *Ibid.*, pp. 100-101.
- 23) *Ibid.*, p. 116.
- 24) *Ibid.*
- 25) *Ibid.*, p. 120.
- 26) *Ibid.*
- 27) *Ibid.*
- 28) *Ibid.*, p. 126.
- 29) *Ibid.*
- 30) *Ibid.*
- 31) *Ibid.*
- 32) *Ibid.*, p. 129.
- 33) *Ibid.*
- 34) *Ibid.*
- 35) *Ibid.*, p. 130.
- 36) *Ibid.*, p. 131.
- 37) *Ibid.*, p. 133.
- 38) *Ibid.*
- 39) *Ibid.*
- 40) *Ibid.*, p. 135.
- 41) *Ibid.*

- 42) *Ibid.*
 43) *Ibid.*, p. 136.
 44) *Ibid.*
 45) *Ibid.*
 46) *Ibid.*
 47) *Ibid.*, p. 138.
 48) *Qa*, p. 821.
 49) *Ibid.*, p. 836.
 50) *AS*, p. 120 : « si elle demeure en retrait par rapport à cette construction dernière, ce n'est pas pour se détourner du discours et faire appel au travail muet de la pensée; ce n'est pas *non plus pour se détourner du systématique et mettre au jour le désordre « vivant »* des essais, des tentatives, des erreurs et des recommencements. » (強調筆者) この引用から無秩序状態を望んでいないことがはっきりと確認できる。
 51) *Ibid.*, p. 96. 強調筆者。
 52) 注27を参照のこと。
 53) *Ibid.*, p. 120.
 54) *Ibid.*
 55) *Ibid.* 強調筆者。
 56) *Ibid.*
 57) これはちょうどボルターが「writing space」と呼び、「hypertext」ということば生み出したセオドア・ネルソンが「docuverse」と呼んだ空間と似ている。

BIBLIOGRAPHY

BARTHES, Roland

1968 « la Mort d'un auteur », dans *Manteia*, 4^e trimestre, 1968 ; repris dans ses *Œuvres complètes*, tome III 1968–1971, Éditions du Seuil, 2002, pp. 40–45.

BOLTER, Jay David

2001 *Writing space, computers, hypertext and the remediation of print second edition*, Lawrence Erlbaum Associates.

ECO, Umberto

1976 *A Theory of Semiotics*, Bloomington, Indiana University Press.

EISENSTEIN, Elizabeth L.

1979 *The Printing press as an agent of change*, Cambridge University Press, 1997.

FOUCAULT, Michel

1969 *l'Archéologie du Savoir*, coll. « Bibliothèque des Sciences humaines », Éditions Gallimard.

1969 « Qu'est-ce qu'un auteur? », conférence repris dans *Dits et écrits I, 1954–1975*, coll. « Quatro », Éditions Gallimard, 1994 (éd. de 2001), pp. 817–849.

HERMAN, David

2002 *Story logic, problems and possibilities of narrative*, University of Nebraska Press.

LANDOW, George P.

1992 *Hypertext, the convergence of contemporary critical theory and technology*, the Johns Hopkins University Press.

2006 *Hypertext 3.0, critical theory and new media in an era of globalization*, the Johns Hopkins University

Press.

McLUHAN, Marshall

1964 *Understanding Media*, MIT Press. 1994.

NELSON, Théodore H.

1965 « A File structure for the complex, the changing and the Indeterminate », dans *Proceeding of the ACM 20th National Conference*.

ONG, Walter J.

1982 *Orality and Literacy, technologizing of the Word*, Methen & Co. Ltd.

